調査報告

従来の発掘調査からみる鳥取城

坂田邦彦

1　はじめに

鳥取城における発掘調査の始まりは昭和55年の二ノ丸調査であり、以来実施された発掘調査は平成19年度までで15次を数える。しかし、調査の多くはトレンチ調査であるため、鳥取城の全容把握までには至っていないが、ここに既往の調査の概略をまとめ今後の研究の一助としたい。

2　調査の概要

江戸期以来増改築を繰り返してきた石垣は、昭和18年の鳥取大震災により城内各所で崩壊の被害を受けた。

昭和32年の史跡指定後は二ノ丸三階櫓石垣の修理に始まり、昭和40年代に入ると公園としての環境整備に伴い二ノ丸、天球丸、山上ノ丸、坂口御門等の石垣積み替えが、昭和50年代になると米蔵跡整備、大菱櫓石垣整備が行われるなか、昭和55年には本格的な発掘調査が実施された。

1・2次調査

二ノ丸走櫓石垣の修復工事に伴う事前調査として二ヵ年に分けて行われ、2層の遺構面が確認された。二ノ丸御殿は、享保5(1720)年の石黒火事で消失し、弘化2(1845)年に再建された記録が残っており、2つの遺構面はそれぞれに相当するであろう。調査では新旧の礎石・建物遺構、排水路跡などが確認された。

3・4次調査

平成2・3年に実施した天球丸石垣の保存修理に伴う発掘調査である。地表面の標高は石垣側で50.9m、山側で50.6mであり、後世の削平を受けているものの、地表下40cm前後、65cm前後で遺構面を確認した。上層の第Ⅰ遺構面では建物跡とみられるピット列や土坑、溝を検出したが、遺構の多くは山寄りに位置している。下層の第Ⅱ構面では建物跡や土坑、溝、瓦溜、石垣に加え比高差4.4m、段数10～11段の古階段の鳥取城に関連するとみられる石段を検出した。天球丸石垣はこれらの廃絶後に積まれたもので、曲輪拡張の様子が確認できた。また、遺構面下には天球丸前面石垣構築に伴う造成が確認され、地山上に何層も盛土しながら遺構面に至る過程が明らかとなった。生活面だけでなく曲輪自体の成立過程の一部が確認された最初の調査となった。

5次調査

平成7年に天球丸の復元整備に伴い実施したもので2・3年度調査の南東延長上に調査区を設定した。先の調査同様標高50.9・50.3m付近の2層に渡って遺構面が広がり、調査では建物跡、溝、列石などが確認された。上層では18×7.6mの範囲内に幅を80～130cmの石敷した建物基礎がみられ、幕末期の絵図にみられる「御蔵」跡と考えられる。下層でもほぼ位置を同じにして建物基礎と考えられる石敷を検出した。周辺には焼石や焼土など、焼けた痕跡が広範囲に確認され、建物が焼失したことをうかがわせる状況であった。天球丸南東隅の石垣沿いに位置していることから、この位置にあったとされる三階櫓跡と考えられる。

3次に渡る調査により天球丸には2面の遺構面が存在することが明らかとなった。石垣を含む下層遺構は上層と比べ軸を異にしている部分もみられ、現天球丸とは形態のことなる曲輪が内包されている可能性がある。

先の二ノ丸の調査とあわせ、曲輪全体の調査が続いていたが、平成９年以降鳥取西高校の改築や、石垣整備に伴うトレンチ調査が増加していく。

６次調査

平成９年には復元修理の事前調査として太鼓御門の裾部および周辺部の調査を実施した。調査区は太鼓御門北西側を中心に宝隆院付近から坂道沿いの道路面下に設定した。調査では昭和18年の鳥取大震災で崩壊したと考えられる石垣や雁木状の石段を構える登城路、石垣の側溝、城絵図に見られる「御前井」に比定される井戸跡を検出した。石段は地山面の上に据えられており、標高の低い下段については石列が遺存するが、石垣沿い(旧太鼓御門下)になると石が抜き取られ、わずかに痕跡が残るのみであった。この石垣沿いでは溝は地表下60cm、地山面は地表下80cm程度で到達するものの、地山直上まで近代の撹乱を受けており遺構の遺存状況は極めて悪いことが確認された。舗装面を除去すると遺構面までは極めて近い位置にあることが明らかとなった。

７次調査

平成10年に中ノ御門周辺で実施した調査である。大手門である中ノ御門は巻頭図のとおり本来は枡形を形成していたが、明治期に解体され現在の形に改変されたことがわかっており、調査では枡形の跡や石段、門礎石などを検出した。北側の石垣では地表下30cmで上部を取り外された枡形石垣が２～３段､高さ1.3～1.4m程残っており標高4.5mで底面に達する。また、他のトレンチでも同様の状況がみられ、石垣は標高5.6～5.8m付近で解体されていることがわかった。南側の石垣沿いの第１トレンチでは地表下１mで門礎石とみられる50cm四方の切石が台石に乗った状態で出土した。標高は礎石の上面で5.6m、台石上面で5.3m前後を測る。

８次調査

平成12年に実施した楯蔵周辺で調査であり、石段、石垣、送水施設を検出した。楯蔵へあがる石段は幅4.2m、高さ2.5mを測り、段数は10段を数える。楯蔵から天球丸方向へは高さ１mほどの石垣が築かれており、これらに沿うように土管を連結した送水管も確認された。石段・石垣は多量の瓦を含む層に覆われており、周辺では被熱した礎石や焼土も検出されていることから、この層は火災等による建物の焼失に伴う堆積層である可能性が考えられる。

９次調査

平成15年には鳥取西高校整備移転計画に伴い第２グラウンド(籾蔵跡)周辺５ヶ所で試掘調査を実施した。標高7.6～7.8m付近の表土面から90cm程度は近代の撹乱やグラウンド整地層がみられる。第１トレンチでは鳥取堀の埋土と考えられる暗灰色粘質土が検出され、第５トレンチでは絵図で南御門の外側に描かれている石垣の一部とみられる石を確認した。また、第２トレンチでは標高6.3m、6.1mの地点で厚さ２～３cmの焼き締まった赤褐色の焼土層が広がり、第３トレンチでも標高７m付近でも確認された。中ノ御門の調査と同様、グラウンド部分についてはかなりの盛土がされていることが明らかとなった。

11次調査

平成17年度に実施した鳥取西高校整備計画に伴う三ノ丸跡で試掘調査である。調査では集石、溝、礎石、排水管等を検出した。標高13.2m付近の地表面から50cm程は近代の層であり、出土した礎石や排水管などは古い時期の学校施設の一部と考えられる。第１トレンチでは標高12.7m付近にマウンド状の集石があり、これらを埋めるように周囲には客土がみられた。同様の状況は第２トレンチでも確認でき、標高12.7m付近より旧地盤面と考えられる整地層が数層みられその下には厚さ２～50cmほどの客土が堆積する。客土層は両トレンチともに1.5mほど確認しており、さらに下層へと続いている。

10次調査

平成17年に実施した天球丸南側および周

辺石垣部分の調査である。第1トレンチでは標高40.1m付近の地山上に30cm程度版築状の締まった水平堆積層があり、その上は谷方向へ傾斜する層がみられた。第3・4トレンチは石垣の裏側に設定された調査区であり、第3トレンチでは谷側（城正面方向）に傾斜する層があり、標高43～44mでは旧表土面と考えられる黒褐色粘質土を検出した。第4トレンチは正面石垣の天端～裾までの標高43～51mに跨る調査区である。土層は～46m付近までは水平、～49mは谷側へ傾斜、～50mは厚さ10cm程度の薄い水平、～51mは厚さ30cm程度の厚い水平堆積の様相を呈しており、天球丸築造時における工程差を捉えることができた。

13次調査

平成18年には先の第4トレンチの延長上の標高43.5～45.8mに調査区を設定した。南北断面で断面の様相は異なり、北側では正面石垣方向へ傾斜し、南側では水平方向の堆積がみられ、北側の標高44～44.5mには旧表土面と考えられる黒褐色粘質土層が広がる。また、周辺の土層観察では45°の傾斜をもつ急角度の整地層も確認しており、近接した場所でも異なる堆積状況であることがわかった。

14次調査

平成19年にはさらに東側（山側）に調査区を設定した。標高46.8～48.8mの土層断面では下層には傾斜する砂層があり、それを覆う形で上層には固くしまった砂礫土が水平方向に堆積する。また、中間付近には被熱し赤変した石や焼土を多く含む層が挟まれ、また、山側では崩落した石垣のような集石も検出された。

平成17～19年の3次に渡る調査は、平面的であった先の調査に対し、断面的なものであり、天球丸成立過程を考察する上でさまざまな問題を提起した。

12次調査

平成18年に中ノ御門周辺で行った試掘調査である。第1トレンチでは標高5.8m付近で上部を取り外された枡形石垣の隅角部を検出した。第2トレンチでは登城路と考えられる山側へ向かい緩やかな傾斜を持つ厚さ2～3cmの整地層が標高5.6m以下に数層みられる。第3トレンチでは標高5.3mで被熱した石列を含む焼土層が広がっており、火災などの可能性が想定される。

15次調査

平成19年に太鼓御門周辺で行った調査であり、石垣裾部を中心に4ヶ所のトレンチを設定した。第1トレンチでは標高12.9m以下で旧登城路と考えられる山側へ傾斜を持つ、厚さ2～3cm程度の砂礫主体の整地層が3～4層程度検出した。第2・3トレンチでは造成面のような層がみられた。また、第1～3トレンチではいずれも現地表面付近を境に石垣の積み替えが確認できるものの時期の特定には至らなかった。

3　遺構面の遺存状態

現在進行中の鳥取城整備復元計画では、幕末期の状態復元を目指しており、以下では地点別に調査結果をまとめ、城内遺構の遺存状況について述べる。

中ノ御門周辺

現在のグラウンドの標高は6.5m前後であり地表下60cm程度はグラウンドの整地面である。枡形石垣は標高5.8m付近で解体されており、明治期の古写真に写る石垣と比較すると当時の地表面は標高5.5mあたりと考えられ、幕末期になるとさらに下であったと想定される。遺構面は深い位置にあるものの、18年第2トレンチのように明治期以降と考えられる掘り返しも確認できるため、遺存状態が良いとは言い切れない。

三ノ丸

平成17年度調査区付近では標高13.4m前後の地表面から40cm程度下がった標高13m付近で遺構面が確認されている。また、同レベルでは学校の旧校舎に関連した遺構がみられ、一部遺構面を撹乱している跡もみられ

ることから幕末期面の遺存状態は良いとはいえない。

平成19年度調査区（高校入り口）付近では標高13.2m前後の地表面から3～40cm程度下がった標高12.8～12.9m付近で旧地盤面に達する。2～30cm程度のアスファルトおよびコンクリートの直下に存在する遺構面は後世の撹乱が著しく、遺存状態は極めて悪いと考えられる。また、三ノ丸東側の山寄りの部分では標高13.4m前後の地表面からコンクリート・撹乱土を除去した標高13m付近には上面を完全に削平された地山面が広がっており、遺構面は存在しなかった。

太鼓門直下（現在の坂道部分）は地表下80cmで達する地山の直上まで撹乱が及んでおり遺構面の遺存状態は極めて悪いと言える。

以上をまとめると、幕末期の地盤面は中ノ御門周辺ではある程度の遺存は期待できるが、三ノ丸へ上る登城路部分については、もともとの遺構面が浅かったと考えられることもあり、遺存状態は極めて悪く、三ノ丸は校舎の配置部分および周辺では撹乱著しいものの、部分的にはある程度遺存していると考えられる。しかしながら山側や現校舎部分についてはかなりの削平および撹乱が考えられ、遺構の遺存状態は極めて悪いであろう。

天球丸

地表面の標高は石垣側で50.9m、山側で50.6mであり、地表部分については戦時中畑であったことなどもあり、撹乱を受けた部分もみられるが、表土から60cm内に2層の遺構面を確認した。先述のとおりそれぞれの面で性格の異なる曲輪の存在が考えられる。遺構面の下は天球丸造成のものと考えられる盛土が数メートル単位の工程で行われている。整備復元に伴う石垣解体により大部分は失われているが遺構面の遺存状態はよかったと考えられる。

二ノ丸

先述のとおり上下2面の遺構面を確認した。調査時地表面に礎石の一部が露出しており、表土から2～30cmで検出した上層遺構面では礎石および礎石の抜き取り跡を検出した。幕末期の遺構面は石抜き等の撹乱は受けるものの地表面から近い位置にある程度良好な形で遺存していると想定される。

以上、地点別に概観したが、遺構面はグラウンド以外の場所については現地表面から比較的浅い位置に存在していることがわかった。また、学校部分については校舎の増改築に伴い改変を受けていることが予想される。

曲輪自体の築造過程のなかでは、数メートル単位の厚い造成層も確認できるが、それらの上に存在する遺構面（生活面）は比較的薄いと考えられる。中でも登城路沿いではこの状況が顕著であり、遺構面が重層的にみられるものの全体としての厚みはなく、江戸期を通して地盤面の高さはそれほど変わっていないという印象を受ける。換言するとある程度の撹乱を受けていれば生活面の多くを失ってしまっていることとなる。

4　おわりに

調査区の制約上、調査成果も断片的なものが多く全体像をつかみづらい現状ではあるが、近年、絵図や文書資料の研究により近代以降の様相が明らかとなってきている。近代以降の状況を捉えることは幕末期の様相を導き出すために有効な手段であり、今後は資料と発掘調査両面からの総合的な検討がより必要となろう。

調　査　一　覧

次数	調査場所	調査期間	面積（㎡）	トレンチ	調査原因	参考資料名
1	二ノ丸走櫓跡	昭和55年11月14日～12月24日	250	1	二ノ丸走櫓石垣修復工事に伴う事前調査	里仁1号墳発掘調査報告書 ・鳥取城二ノ丸走櫓跡　1981 (*1)
2	二ノ丸走櫓跡	昭和56年5月26日～7月27日	130	1	二ノ丸走櫓石垣修復工事に伴う事前調査	里仁1号墳発掘調査報告書 ・鳥取城二ノ丸走櫓跡　1981 (*1)
3	天球丸跡	平成2年5月1日～7月31日	320	1	石垣の保存修理に伴う事前調査	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 天球丸発掘調査概報告書　1992 (*2)
4	天球丸跡	平成3年8月1日～12月20日	530	1	石垣の保存修理に伴う事前調査	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 天球丸発掘調査概報告書　1992 (*2)
5	天球丸跡	平成7年10月1日～12月12日	164	天1 裾4	天球丸の復元整備に伴う事前調査	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 天球丸保存整備事業報告書　1997
6	太鼓御門跡	平成9年8月1日～10年2月28日	170	6	復元修理に伴う事前調査	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 太鼓御門発掘調査報告書　1998
7	中ノ御門跡	平成10年10月20日～11年2月28日	135	7	復元修理に伴う事前調査	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 中ノ御門発掘調査報告書　1999
8	楯蔵跡	平成12年10月2日～13年3月23日	340	1	石垣の保存修理に伴う事前調査	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 楯蔵跡発掘調査報告書　2001
9	籾蔵跡周辺試掘	平成15年7月22日～9月30日	80	5	鳥取西高校整備移転計画に伴う事前調査	「鳥取城関連遺跡」『平成15年（2003）年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』　2004
10	天球丸跡試掘	平成17年6月15日～12月27日	73.6	4	天球丸石垣の保存修理に伴う事前調査	未報告
11	三ノ丸跡試掘	平成17年8月22日～10月26日	40	2	鳥取西高校整備計画に伴う事前調査	「鳥取城三ノ丸跡」『平成17年（2005）年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』　2006
12	中ノ御門跡周辺試掘	平成18年10月30日～19年1月29日	100.6	3	鳥取西高校改築に伴う事前調査	「鳥取城跡」『平成19年（2007）年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』　2008
13	天球丸跡試掘	平成18年10月30日～11月2日	15	1	天球丸石垣の保存修理に伴う事前調査	未報告
14	天球丸跡試掘	平成19年6月28日～7月31日	9.1	1	天球丸石垣の保存修理に伴う事前調査	未報告
15	太鼓御門跡周辺試掘	平成19年7月21日～11月7日	53.4	4	鳥取西高校改築に伴う事前調査	「鳥取城跡」『平成19年（2007）年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』　2008

資料はすべて鳥取市教育委員会刊行
*1　鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理概要報告書』　1987　に再録
*2　鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平天球丸保存整備事業報告書』　1997　に再録